施設のオープン化に関する実践的研究

小児療育相談センター
佐々木正美　鈴木勝治
青い鳥愛児園
篠崎紀夫　清水博一
神奈川県児童医療福祉財団
大井英子

はじめに

心身障害児施設がもっている専門的機能を生かして，いわゆる措置された子ども達だけでなく，地域の子ども達へどうかかわっていくかがオープン化の基本的な課題である。

本研究では，横浜市磯子区汐見合団地内にある青い鳥愛児園（精神薄弱児通園施設，財団法人神奈川県児童医療福祉財団設置経営）を基盤にして，「施設オープン化のあり方」を実践研究してきている。

研究の初年度には，従来実施してきた諸活動を整理し，２年度目にあたる昨年度は，卒園児ケアーの実態調査を中心にそのニーズを把握検討した。今年度は，それらをふまえて「施設のオープン化」活動を現状の中でどのような形で具体的に試みられるのかを実践研究した。具体的な試みとして，通常の保育活動と並置して，「地域サービス室」準備室（仮称）という形で，オープン化の活動を集約できないか検討している。ここに含まれるものは，従来より実施しているものの発展継続の形と，今年度より試みとして実施しているものがある。対象地域は原則として横浜市南部地域（磯子区・港南区・金沢区・戸塚区）である。

Ⅰ「施設オープン化」活動内容

― 地域サービス室（仮称）の活動 ―

1. 巡回療育相談

(1)在宅児ケアー

①母子見学相談

通園児（措置児）以外の地域在宅障害幼児に対する母子見学相談活動を33ケース（57年１月現在）実施した。主に入園・進路（幼稚園・保育園を含めて）を考える時期の母子が多かった。方法としては，通園児の通常の保育の中に一日入り，その中での当該幼児の観察をし相談に応ずる。母親は単に外見的な見学ではなく，体験的に行動を共にした見学を行なう。その上で，進路上の悩みにつき相談したり，育児上のアドバイス等をうける。

②地域自主訓練会への巡回相談指導

横浜市内には，自主的に親自身が運営する障害幼児の自主訓練会が21カ所ある。市内南部地区には，磯子区１カ所，金沢区１カ所，港南区２カ所，戸塚区４カ所の計８カ所できている。このうち今年度は派遣要請希望のあった５カ所について出向いて指導した。

方法としては，通園児が来園しない土曜日に，保育指導職員が３名ずつチームを作り，定期的に訪問指導を行う。訪問指導の間隔は１カ月～２カ月に１回である。指導内容は，１名が親のグループへ入り日常生活の中での指導助言を行う。他の２名が子どものグループに入り観察チェックを行う。その上で個別の相談に応ずる。最後に自主訓練会の指導スタッフと話し合いの場を設けて，保育内容のアドバイスとともに，母親面談の報告と意見交換を行う。

自主訓練会へ定期的に出向くことは，地域の障害幼児の実態にふれ，通園してくる限られた子どもの姿だけでなく，地域における障害幼児全体の問題をとらえる良い機会になっ

ている。幼稚園・保育園を選択していく子ども達の実態がわかり，通園施設の果たすべき役割を今後検討していくよい場となるであろう。

⑵卒園児ケアー

①卒園児家庭訪問

青い鳥愛児園は昭和42年開設以来15年目を迎え，卒園児は360名に達している。卒園児は多くの問題をかかえているが，卒園児家庭訪問は，卒園児のケアーであると同時に，現在通園している子ども達を指導する方向づけを得ることにもなる。

家庭訪問の内容は大別すると次の2つである。1つは主に夏休み期間を利用してのフォローアップの活動であり，卒園後の成長過程に出てくる問題を把握し助言指導を行なう。もう1つは，緊急に来園なり電話なりで相談を受けた後に，訪問の必要性があり随時実施したものである。両者を含めて，卒園児への家庭訪問は57年1月現在で47件である。

②卒園児親の会への活動参加助言

卒園児に対して個別に対応するだけでは，全体をフォローすることはできない。卒園児は「はばたき会」という同窓会に所属している。「はばたき会」は会員360名となり，同窓会の開催や実態調査などの全体的な取り組みはできるが，個々の会員が相互に求め合うには大きくなりすぎてしまっている。その為52年卒以後では各年度毎に15名～20名程度の卒園年次毎のグループができている。これらの会員活動，合宿やハイキング，相談会などに職員が参加し，時々の相談や悩みを聞き助言・援助をしている。

③来園・電話による相談

卒園児の成長に従っての様々な問題 ― 進路，学校のこと，家庭内のこと，医療，訓練などを園に相談してくる。来園してくる場合と電話の場合がある。総じて，電話の場合の方が緊急性の高いケースが多い。園で全ての問題に対応できる訳ではないが，解決の糸口をつかむ意味で相談してくるケースが多い。

④学校・幼稚園・保育園訪問活動

卒園児ケアーの一貫として，卒園後の進路である学校・幼稚園・保育園への訪問活動を行なっている。これは主に在園中の資料を伝え，処遇のつながりの中で卒園児がよりよく成長できることを目的としている。訪問をきっかけにその後も連絡をとるなかで，単に施設毎のつながりだけでなく，地域としてのとらえ方も出てきている。しかし，学校・幼稚園・保育園への訪問活動は，その重要性を認めながらも充分には実施できない現状である。

2. 認知学習指導（個別指導）

今年度は卒園児ケアーのひとつとして，卒園2年目までの子ども達を対象にして，個別の認知学習指導を新たに始めた。対象児は22名で，月1回程度面接指導する。

在園中に指導した運動プログラムと認知学習プログラムのうち，運動プログラムについては比較的家庭で継続して実践されている。しかし，認知学習については積み上がっていかないし，学習方法も家庭のみではむずかしく，教材もないのが現状である。そこで，在園中に始めた認知学習指導を継続し発展させるために，発達チェックと学習プログラムを立てて子どもの発達に見合った認知学習の指導を行なうとともに，必要な教材（手づくりのものが多い）の貸出しも併せて行なった。

3. 感覚統合訓練（グループ指導）

全国的に通園施設の通園児の重度化・低年齢化の傾向が言われているが，青い鳥愛児園児の現状では重度化は著しいが，措置児では低年齢化までいっていない。その理由は，早期療育の有効性が認められながら，横浜市内ではまだ系統だった指導がなされていないことによる。その現状をふまえて，在宅の3歳～4歳の自閉傾向児に対して，グループによる感覚統合訓練を年度途中から始めた。通園児の降園後の時間を利用し，週2回，8名の子ども達に対して行なっている。

表 1.　地域ケアーの月別実施件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	計
感覚統合訓練室	—	—	—	—	—	—	—	32	45	54	131
認知学習室	—	1	4	24	14	15	24	16	19	13	130
母子・見学相談	—	1	1	—	—	4	11	6	7	3	33
自主訓練会への巡回相談	—	—	9	—	—	8	18	6	—	23	64
家庭訪問	10	7	2	1	15	10	—	—	2	—	47
卒園児の会の活動参加・助言	—	17	7	77	—	—	6	15	42	8	172
相談（電話）	20	10	6	2	—	12	5	7	1	—	63
相談（来園）	8	6	10	6	12	3	4	2	2	—	53
学校・幼稚園・保育園の訪問	—	—	4	3	—	1	2	2	2	—	14
計	38	42	43	113	41	53	70	86	120	101	707

4.　ボランティアとの協力体制

ボランティアは専門施設と地域をつなぐ重要な位置にある。同時にそれは，障害をもつ子ども達と地域のつながりのパイプとなる。

ボランティア活動でかかわっている内容は㋐保育ボランティア　㋑教材づくりボランティア　㋒園舎の清掃や洗濯ボランティア　㋓子どもの家庭学習援助のボランティア　㋔送迎援助ボランティア（何らかの理由で家族だけでは通園の送迎ができない場合）などがある。

青い鳥愛児園では，開園以来ボランティアを受入れ，共に築いてきた。活動の形態や内容は必要に応じ変化してくると思われるが，今後もボランティアの育成と協力を得てオープンな施設運営を目指していく。

Ⅱ　通園施設のあり方

― 総合通園センターへの提言 ―

通園施設が障害別で分類された専門施設という現状のあり方から，新しい方向として，一定の地域に対して責任をもち，障害をもつことによって生ずるあらゆる問題を受けとめる場として，どうあればよいのかについて検討をすすめてきた。その内容の概略は次の通りであり，具体的な機構図（案）は図1のとおりである。

地域総合通園センターの内容・機能

①診療相談指導機能

保健所・医療機関等で早期に発見される子ども達を，医療を中心に個別に受けとめて，その子の発達援助を行ない必要なサービスにつなげる。個別指導（外来診療相談）ですむ場合，通園指導，訪問指導が必要な場合等，それぞれの必要に応じて検討する。

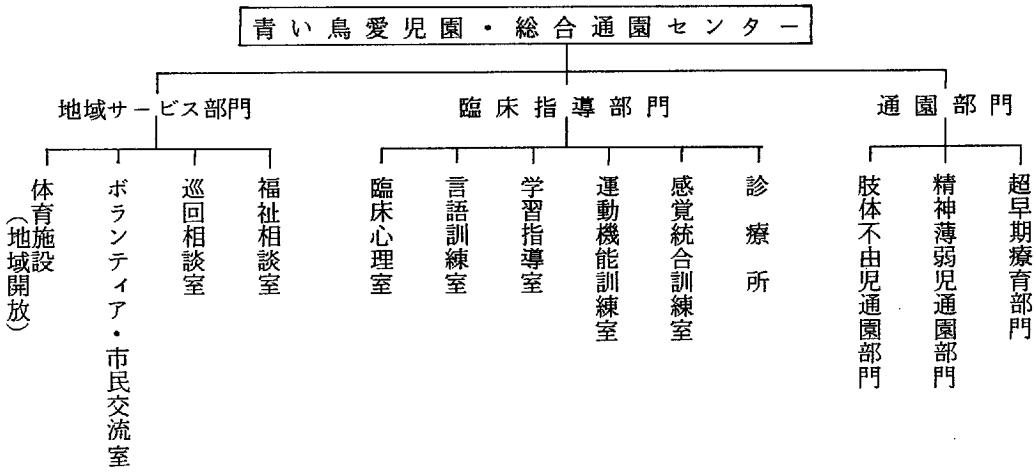
②総合通園機能

障害別で分類することなく，一定の地域の

表 2.　ボランティア活動参加状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	計
保育ボランティア	22	36	37	34	—	22	34	25	11	29	250
教材づくりボランティア	—	—	20	55	14	28	31	32	18	30	228
洗たく・清掃ボランティア	6	12	12	6	—	9	15	9	12	9	90
労力奉仕ボランティア	—	—	25	—	—	27	—	24	—	28	104
送迎ボランティア	13	12	10	8	—	—	—	—	—	—	43
計	41	60	104	103	14	86	80	90	41	96	715

図1. 青い鳥愛児園・総合通園センター機構図(案)



通園指導がのぞましい子ども達については全面的に受入れていく。とくに，超早期の通園指導ができる体制をつくる。

③地域サービス機能

今年度重点的に実践研究してきた内容をもち，より徹底してきめ細かく，地域や学校・幼稚園・保育園などと連携を深め，質・量ともにゆたかにする。

④地域処遇委員会構想

一定の地域における障害をもつ子ども達への発達を援助するために，地域内のそれぞれの機関施設が相互にどういう役割を果たせばよいのかを，日常的に個々の子どもに即して考える場を設ける。

Ⅲ 今後の課題

(1)施設のオープン化の主要な柱である「地域サービス部門」の実践的な研究を今年度は主体にしたが，実践的研究と併せて，現状にとらわれないあるべき姿の検討をすすめる。

(2)通園施設のあり方を総合通園センター構想として提示したが，その引き続きの内容検討と同時に，その実現性のプログラムを検討する。

(3) 地域内における障害幼児からの，生涯処遇についての体系を検討する。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

心身障害児施設がもっている専門的機能を生かして,いわゆる措置された子ども達だけでなく,地域の子ども達へどうかかわっていくかがオープン化の基本的な課題である。

本研究では,横浜市磯子区汐見合団地内にある青い鳥愛児園(精神薄弱児通園施設,財団法人神奈川県児童医療福祉財団設置経営)を基盤にして,「施設オープン化のあり方」を実践研究してきている。

研究の初年度には,従来実施してきた諸活動を整理し,2 年度目にあたる昨年度は,卒園児ケアーの実態調査を中心にそのニーズを把握検討した。今年度は,それらをふまえて「施設のオープン化」活動を現状の中でどのような形で具体的に試みられるのかを実践研究した。具体的な試みとして,通常の保育活動と並置して「地域サービス室」準備室(仮称)という形で,オープン化の活動を集約できないか検討している。ここに含まれるものは,従来より実施しているものの発展継続の形と,今年度より試みとして実施しているものがある。対象地域は原則として横浜市南部地域(磯子区・港南区・金沢区・戸塚区)である。